宗像

毎月一日発行
発行所
宗像大社
宗像会
福岡県宗像郡玄海町
電話玄海代②1311
定価一年送料共　500円

神具、装束
結婚式場用品
株式会社　井筒
九州店　福岡市吉塚一丁目二三番三号（〒八一三）
電話福岡（〇九二）六五一九四五六番
本社　京都市下京区油小路六条北入（〒六〇〇）
電話京都（〇七五）三四一三三四（代）〜四番
三五一一三三四・六六六番

宗像大社菊花展を
西日本菊花大会に改称

運営理事全員一致で決まる

宗像大社菊花会の運営理事会が去る九月十六日午前十一時から開かれ、十一月一日から開催の第三回菊花展に関する重要案件などについて討議された。

この日の主な議題は出品数の調整であったが、会議の始めに事務局より経過報告がなされ、諸折衝段階で展名に誤解が多いことや、本会のあり方と今後の望ましい型として展名変更の提案が示されたことによって議題も大幅に変更。

まず展名変更から審議された。この結果、従来の宗像大社菊花展を西日本菊花大会に改めることが全員一致で決定された。

この決定に基づき、宗像大社菊花会が会則目的の条にうたう〝花を愛するゆとりある人心の育成をはかり、和みのある家庭、豊かな地域社会、平和な国土形成のため〟の本旨を確認するとともに、全員一致し、この方針で当展を推進することとなった。

今後は県内はもとより西日本地区の同好者が、どしどし当会に関与され、当展を基に目的達成の為、御尽力いただくことを熱望するとともに、その為の働きかけをしてゆくことや、当地の名誉ある花展開催への一層の努力を払うなどの具体的方針も決定。

次に本来の議題にかえり出品数調整について話し合うこととなったが、一大方針決定に基づき各運営理事は各会にかえり再考を要すことで一致したため当件を延期、他の案件を討議したあと、次会を十月十四日全理事を招集して開く事を決定し閉会となった。

好天のなか最高の人出
――宗像大社放生会――

昭和四十八年十月一日午前九時三十分、数百年の伝統をもつ宗像放生会は爽秋の玄海洋上に響きわたる花火の雷鳴と共にその幕が切って落された。払暁より御座船のお供をせんものと筑前大島港に集結した凡そ六百艘の満船飾に彩られた宗像七浦漁協組合員奉仕の供奉船団は、この刻、吾遅れじと一勢に紺碧の玄海灘に踊り出た。白い波頭を蹴たてて進む大船団、国家鎮護宗像大社と大書した大幟が御座船上の碧空にはためく。一方陸上の神湊海岸ではこの盛儀を拝観せんものと西日本各地より参集した人々凡そ八千名、壮厳と絢爛、歓声と喫声の中に一時間の海上神幸をおえ御座船一艘は悠々神湊に入港、これより神湊屯宮に於て前日より沖中両宮お出迎えのため御駐輦の辺津宮と三宮お揃いの屯宮祭が営まれた。屯宮祭終了后陸上神幸となり、秋の日射しをうけて光る矛のきらめき、風輦の鈴の音、町すじに跪く氏子の人々、この人々の熱い祷りの中に三宮御神璽は正午無事辺津宮に入御された。これより放生会第一日祭が始まり、郡内神職より奉幣、氏子会代表による奉幣のあと、舞の笛の音が拝殿から流れる。

翌二日、午前八時、鎌倉時代にその起源を発する流鏑馬式が神門前馬場で行われ、秋気をつんざく矢のうなり、馬のいななき、ひずめの音に、拝観者の歓声が田島の神奈備に木魂する。午前九時、境内相撲場では、郡内中学校奉納相撲大会が行われ、境内は早朝からお祭り気分に満ちあふれた。太鼓が放生会二日祭の開始を告げ翁舞が奉納される。陸続と集まる参拝者に、さしもの大駐車場も昼頃より満車となり、夜半に至っては釣川土堤にえんえんと連がる車の列に整理員も柔然となった「こんな人出とは思わなかったなあー」と大人はため息をつき、「人に押されて風船が買えなかった」と子供は泣きじゃくる。雑踏は深夜まで続いた。

放生会三日祭も快晴の中に無事終了、引き続き宗像護国神社に於いて秋季大祭が行われた。神前に額いた遺族の老婆が今年の「田島さま」の賑いを英霊に語りかけていた姿が心に焼きついた。午后二時より献茶祭が行われ、拝殿に漂う香のにおい、拝服席の一服の茶のかおりは、凡ての祭りをとどこおりなく竟え安堵をもたらした。

【御案内】

宗像大社遷宮大祭をトし、精神復興を希って斉行される恒例の遷宮記念大祭の日程並諸行事がこの程、左記の通り決定しましたので御案内申し上げます。

遷宮記念大祭日程

（大祭期間　十一月一日〜十五日）

一日　午前十一時　月次祭
三日　午前十一時　文化祭
十一日　午後　七時　大祭宵祭
十二日　午前　十時　**遷宮記念大祭**（浦安舞、風俗舞奉納）
午後　二時　献茶祭（南坊流小方社中）
十日〜十五日　七五三祭

◇　◇

神賑諸行事

奉納剣道大会

三日午前九時より第四回宗像郡剣道大会が行われます。

西日本菊花大会

第三回大会が名称も改め、西日本最大の菊花大会として福岡県後援のもとに**十一月一日から二十日**まで盛大に行われますぜひ御観菊下さい。

第二回宗像大社献詠短歌大会

福岡県内の各地各会の著名な先生方が選をされ、県内の一つの大きな短歌大会として十一月十二日午前十時から開催されます

奉納盆栽展

十一月十一日から十三日まで祈願殿内に於いて、約百鉢の盆栽が出品され盆栽展が開かれます

論説
伊勢神宮の式年遷宮について

日本人が民族的聖地として尊崇し、心のふるさと心のよりどころとして敬慕する伊勢神宮、今秋は六十回目の御遷宮が行われます。これを式年遷宮と称し、今から約千三百年前に天武天皇が、二十年に一度の制度をお定めになって以来、一二の例外はあったが連綿と引き継がれて今日に至っています。御遷宮の斎行は内宮が十月二日、外宮が同五日であります。

明治以後の神社制度で神宮と称する大社が増加したので、他の神宮と区別するため伊勢の名を冠していますが、正式には単に神宮と呼べば伊勢神宮を指すのでありました。官国幣社の社格があった時代も、神宮は別段の位置におかれて社格はありません。それは皇室の御祖先であり、また日本国民の総氏神ともいうべき天照大神（内宮）と、豊受大神（外宮）とをお祀りしてあるからであります。

太古は同殿共床と申して、天照大神の神勅のまにまに皇居の内にお祀りしたのでありますが、第十代崇神天皇の御代に神威を畏んで倭の笠縫邑（ヤマトのカサヌイノムラ）に鎮祭せられ、更に八十七年を経て第十一代垂仁天皇の御代に現在の地に奉祀したことが記録に伝えられています。

外宮の豊受大神は始めはお祀りされていません。第二十一代の雄略天皇の御代に至って、同じ地にお迎えしてから外宮の祭祀が行われるようになりました。この大神が国民の生活に欠くことのできない衣食の道を掌られる祖神であったので、天照大神の天下万民愛護の御精神から側近くお祭りするよう教えられたのでありましょう。

天武天皇の御代に始まった式年遷宮は、二十年毎に新たに社殿から調度品に至るまで造り替えられて遷御の大典を執行する伝統のお祭りを指します。この制度は延喜式の大神宮の巻に「凡大神宮廿年一度造替」と明記されています。神祇を奉斎する神ながらの道は、あらゆる祭儀には必ず厳粛な祓いが先ず行われることによってもわかるように、清浄純正を以って根本をするが故に、時を定めて新しい用材で社殿を改築し遷御を仰ぐことは、御鎮座の精神に則る尊厳な例典となって来たのであります。制度確立後の第一回の式年遷宮は、次の持統天皇の御代に行われています。

世情争乱の時代僅かに数度の略式遷宮が行われた外は、連綿として伝統は保持されて今回の前には、昭和二十八年に第五十九回を数える盛典が規則正しく斎行されたのであります。

社殿の結構は、造殿様式の中でも最も上代風に属し、桧の素木、萱葺、堀立柱という清素を旨とした神明造と称されています。その規模は御鎮座以来今日に及んで殆んど変っておりません。大神の鎮ります正殿を始め、幣帛神宝の類を収納する東西の宝殿及び外幣殿、祭儀に用いられる御饌殿その他の殿舎御門等百数十箇所が造替されたと拝聞します。また遷宮の祭儀に奉納せられる御装束神宝の品目は、いずれも旧慣のまま調製されるのであります。

式典の日時は古来勅定の上宣下せられる例となっているが、昔は九月十五日（豊受大神宮）同十六日（皇大神宮）を式月式日と称したのを、明治二十二年度から皇大神宮遷御の儀十月二日、豊受大神宮は十月五日に定められました遷御の儀を中心としてその前日には御装束神宝読合の儀竝に河原大祓が執行され、またその翌日には大御饌及び奉幣の儀が斎行されるのであります。これら諸儀式の中でも、遷御の儀と奉幣の儀は最も重要な意義を持つもの故に、その御式次第は勅定される例となっています。

今日まで千数百年間、時代の変転世情の推移はあっても、遷宮の制度は改変を見ることもなく、あらゆる時代を通じて歴朝深く御心を注がせられ、国民もよく奉賛しつつ伝統の精神と祭儀の礼典をかたく守り通してきました。ここに民族的聖地に心のよりどころが生きていると云えましょう。

昭憲皇太后の御歌に「新宮にいつきまつりて皇神のみいつもさらにあらたまるらむ」とあるが、式年遷宮の行われた後に詠まれたものと拝察されます。新殿に遷御された皇祖の御威徳の更新に、深い意義が考えられます。国家の生命が新しい息吹きを増し精気を加えて、皇祖を中心としての神祇に対する崇敬が、わが民族の平和繁栄の根本義であることを教えています。

（白雲）

阿蒙少言

三人よれば、文珠の智慧ともなるが、またかしまし（姦）ともなる諺、古くて新しい。後者は昔女性の井戸端会議に代表され、今はアパートかマンションに住む情報婦人が負う。撒かれた情報は、不和反目や家庭争議等の準公害とはっなても、内助の功とは縁遠い○土佐の山内一豊と言っても感興がない。これに「の妻」と続くと、奥方千代さんとへそくりで買った名馬が、高知城の銅像のように大写しになる。一豊君影がうすい。日向の安井息軒と言へば「の妻」と続かなくても、江戸時代の碩学として彼自身が有名。妻のたまさんは日南稀に見る才媛と伝えられるが、息軒の勉学を助けた賢明は一般に讃えられない。これが真の内助の功○現代でも学問に限らず立志伝中の人に挙げられる傑物は、概ね裏に夫人の知られぬ労苦がある。主人の名に於いて事業が開花結実すれば、妻は合作の陰にあって名はいらない○反対に夫が優秀な資質と勤勉を持っていても、妻が三者会議のチャンピオンであっては、内助どころか六十年の不作。伝説は太公望とソクラテスの細君を悪妻の極本としているが、それでも両者とも聖賢の列に入る。釈迦が伽毘羅城王子の栄華を捨て、忍苦の放浪に悟道の光を求めたのは、生母摩耶の溺愛を嫌ったのが動機か○「女賢うして牛売りそこなふ」の戒め、日常の人間関係に照らして妙味を感ずる。姪の縁談で度々訪れた夫人が、言わずもがなの一言、持参金百万円、これですべてご破算。立身出世を志していたとしても、下級武士一豊が黄金持参の条件を見せつけられたら、気骨が承知しなかったと思う○汚職の背後に良妻は居ない。無軌道放埒の家庭に賢母は待たない。更に現代の虚しさ、金と権力に生き方を求める所から来る。

（白雲）

第一四七回　宗像大社歌会詠草
毎月十五日〆切　詠草到着順

田久　小方　実
憧れのマドンナとかや病みてなお詠みつぐ君の歌の冴えたり

田島　吉武　武雄
行き過ぎて思慕にはあらぬ振り返り彼女もまたも振り返り視し

深田　中野　節子
黒子島眼下に見降す天主閣我が恋ふる壱岐の島おぼろに見ゆる

徳重　石松やす子
浄過水の波紋に揺るる水蓮の葉かげに緋鯉数多憩えり

名残　竹原　圓
ふる里の家に戻りて幾年か山の麓にまた夏の来し

福岡　桜井　ツ子
わが想ひはるけきかなや秋空にまぶしき雲の移るひとときに

田久　立花　勇雄
老いしわがその日を思いつゝ虫の声きく夜半を眠らず

曲　天野　トモエ
露ふぶむ芙蓉の紅白鮮やかに夏ゆく庭に萩の咲き初む

東郷　藤崎　辰子
隣り家の陽復と知りて畑隅に孝行竹の笹切り余す

勝浦　永島　文子
夕映に綱張りをれば戌亥空渡り始め来し鴨の一群

福岡　吉田　信夫
わが古稀を祝ふと子らや孫どちが顔を揃へて遠くより来つ

八幡　安川　浄生
やがてダムの底ひとならむこの峡の薄の穂群光りてそよぐ

東京　花田文五郎
雷雨止小池の鯉は跳ている庭の朝顔睡葉となり

津屋崎　内田　久美
梅雨の間の夕べを外に出で来れば木の間縫いつゝ鶯の啼く

武丸　原田　リノ
一うねの畑も大切に耕せるここらの家の構えは大し

福岡　江崎　琴子
うつ蝉のつかの間の命あはれなり庭のあちこち蟻の群れゐぬ

光岡　河村　久光
薄明けの街に並びし外燈の弱く光れど家々戸開けず

光岡　原田　琢磨
バトミントンつきつゝ声たつ少年の顔に赤き夕陽照りつく

宮田　片山　一
重々と柿の青実の垂るる径伐るには惜しと思ふ幾日を

田熊　鷲津かつ代
にこやかに主治医の君の聴きたまふ老いわれの主訴愚痴にも似むか

吉武　早川　須磨
青き田に草取る人のかがまり作業衣白く暑き陽の射す

戸畑　田中ハツセ
結納の指輪を小指にはめて見て光り具合を一坐にも見する

戸畑　藤井　孝子
名月や月の光りは変らねど変りゆくかな人の運命は

宮田　北原　君子
陽炎の立つ庭先に黄蝶を手につかまむと幼馳け行く

武丸　立石ろせ乃
幼くて母をしくせしわれなれば体いとへと娘に言ひきかす

大井　安部　重郎
さわやかや玻璃器に注ぐ水透きて一日ごとに秋深みゆく

大井　安部　静子
つややかに枝垂れるほどの青蜜柑摘果をせよと夫は言へども

津屋崎　占部　由久
つくつくしかな〳〵なき出暑さ残れどそこはかとなく秋気漂う

宗像　中村　幸
むし暑き部屋には入らずサルスベリの花をゆすりて遠くえゆく風

原町　八波　五月
老二人後幾年の幸福を我には過ぎし人に添い来て

津屋崎　菱花　女
降り続く雨に一本の葉鞘頭色鮮やかに庭を彩る

津屋崎　麦野　時雄
イチジクのつぶらなる実を朝夕にちぎりてふくむ裏の果樹園

田熊　岡部　緑陽
手をかざししあわせ告ぐる声までがきこゆる如き娘の写真来る

福間　井原素比古
住み古りし家居に白く御符ありて秋の祭りも終りぬるかな

年々盛大になった
海上神幸と神賑行事
—宗像大社放生会—

宗像大社の秋季大祭は近年で最高の人出を記録するなど大いに賑わった。

海上神幸はもとより、もうすっかりお馴じみとなったこの大祭の神賑行事は、人々を楽しませながら祭り気分を大いに盛り上げた。

流鏑馬（やぶさめ）神事

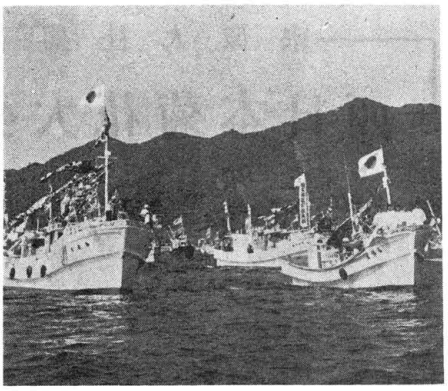
十月二日、午前八時流鏑馬奉納式のあと人馬ともにお祓いを受けて流鏑馬神事が始められた。

この神事は昔から郡民が作物や生活事の吉凶を占ってきただけに、早朝にもかかわらず観者が馬場道の両側を埋め、放たれる矢に一喜一憂。また、放たれた矢を拾うと幸運とされ、あちこちで様々の歓声が聞かれると宗像独特の祭り気分は徐々に昂まっていった。

奉納相撲大会

流鏑馬を参観しおわった人々は吉凶評を語らいつつ大社の相撲場へと移る。この日午前十時から、ここに二番の奉納相撲大会が行われた。

同大会には、郡内各中学校から二、三チームづつが参加し、白熱した戦いを展開し参観者のやんやの喝采を浴びた。選手たちのすばらしい体格に、「りっぱな若者じゃ」と感心する老人、ヒゲをたくわえた選手に「頑張れよ」とひと際高い声援がとぶなど、郡民和楽のひとときであった。



自衛隊音楽隊奉納演奏

同日二時からは陸上自衛隊の音楽隊奉納演奏、並びに演奏会が行われた。

まず祈願殿前に整列し、ここから正面参道を演奏しながらまっすぐ進み拝殿前で奉納演奏を行なったあと、本殿脇で演奏会を開き、流行歌から童謡、軍歌、ポピュラーなど色々折り混ぜての楽しいもので、子供から大人達に至るまでを大いに喜ばせた。

献茶祭

三日の午後二時から南坊流、滝口社中による献茶祭が行われた。

同流準事長以下の参列のもと、神前にふさいくとした芳香が漂い大祭最終日をかざった。

神々の秘宝に驚き
——大分の宗像大社国宝展——

十月五日、大分文化会館において幕あけした「宗像大社国宝展」は十四日盛況のうちに終了した。

開会に先だち、会場に特設された祭壇の前で厳かに神事が斎行されて続いて大分県知事をはじめとする主催者側各団体の手によってテープカットが行われた。

会場では、別府大学舌川光夫教授の説明による招待客の特別観覧に移り、地元小学生鼓笛隊により華やかに国宝展の幕あけとなった。

今回出品した御神宝類は、神津宮祭祀遺跡出土神宝の国宝及び重要文化財指定を含む三百点以上の最も多くの人を驚かせた金製品をはじめ国でも類を見ない金色さんぜんたる馬具類を始めとして〝鏡鏡類装身具類、又社伝神宝〟足利尊氏〝の甲冑等々である。更には会場に、神の島の風景写真や調査の写真も展示し、神秘の島の全容を網羅し観覧者に良りよく理解して戴けるように構成され、好評を博していた。

会場につめかけた考古学研究者郷土史家、学生等は初めて見る偉大な旅遺産に接し、感嘆と驚嘆のまなざしで言葉もなく、すっかり神々の秘宝に魅了されていた。

先報は、虎皮下のお返しで、おだてと気づいていることを知った。

天を打って即死した。何人かの日本軍人もこれを目撃した。約一ケ月後祖国から送られた新聞を見て驚いた。大活字で転落即死氏の壮烈な戦死を報道している。敵弾雨飛を物ともせず軍力かさして率先して突進と。よい勲章に年金がつく、殊勲を立てての討死なら遺族の名誉であり、支給金も多額になる。現地からその報告は、義理人情が武士の情かもうがって八百、然し公的機関の発表は事実となる。何もこの時事を一人で悩む。不可能の文字はナポレオンの字引になくても、不可解は誰の辞書にもある。面の皮厚ければその皮になり易い。

（落花生）

虎の皮とうその皮

あてにならない成果を計算に入れる場合に、ひき合いに出される場合に、ひき合いに出されるのが、取らぬ〝の皮である。狸が気で殺して喰っている人間どもを驚えに顔を出すのは外にもあるが、いずれもかんばしくない。

狸の皮も高貴な敷物には使われず、百獣の王者虎の皮の格の高さには及びもつかない。

「虎は死して皮を残し人は死して名を残す」と、四角張った感じの出世主義の教訓がある。今頃口にする先生も居ないが、聞いて悠か。今日割らぬ者が多いようだ。

「人は死してその皮を残す」ある。将官勅任官と従三位以上の位階保持者を閣下と呼んだ。肩書好きの神主にも勅任官待遇というのが全国に数人居た。若い頃のい

ところで、人間の名は何のために残さねばならないのか。どこに貴様、お前、お主。

官尊民卑の風潮の産物に閣下が使った手紙の脇付に、侍史焔石机が歴史となれば、それこそその皮である。

三十余年前の大陸戦線での話。

小なりその皮を残して死ぬこと誤りでないと結ぶ。

社会生活の主要言語交流である。神の国だから非常に敬語が多く、また複雑でもあって、世界中に礼程身分の階段を表現している国はない。長上を敬うことは結構だが、言葉による敬意は反面に軽侮を伴う。そして元来敬語であった筈が、いつしか軽語になっている。

漫筆明暗箱 (8)

薄汚れた煎餅布団に坐わる貧乏書生を、虎の皮に祭り上げられては切角貰入用に皮を残した虎も浮かばれまい。虎皮下は格別で通常の敬語に虎皮下と書いてあって苦笑したものである。

鈴木大拙先生でなくても、書かれた歴史は鵜呑みに信用はできない。学問的とか科学的とか言っても、資料表面の事実は、その内面の真実の表現ではないことが多い。人間は義理人情から悪を善と証したり、利欲の野望から針を棒に化したり、謀計の必要から白を黒と報じたりする。それに絡まる文書記録が歴史となれば、それこそその皮である。

さり乍ら、純真動機の至誠と出世主義のうえとが同居するのは、英霊の浄域の温慮を奇妙にする。仕方がない人間どもの世界。昭和政治史という歴史が後年作られても、献金何百億の正確な出所と使い方は活字になるまい。現に床木明の怪談であるが故に、公害が流行で公害ブローカー活躍、離婚が激増で駅内ロッカー嬰児死体で繁盛。その皮をかぶって現代にも流れて行く。

虎の皮ほど珍重されなくても、うその皮より猫の皮の方が三味線になって鳴る。

「度とい機会だ、お通し申せ」ほうたる軒秩が部屋に入り弘世に低頭して口を開いた

「恐懼、館主殿の知遇を蒙り思わずこの地に永遠留をいたした拝聞すれば、新探題今川氏俊殿は九州

〝祈る〟交通安全

秋の交通安全週間の初日、当社恒例行事となったお守配布が、宗像警察署、宗像郡交通安全協会、宗像大社の三者一体となって国道三号線宗像バイパス城山峠交差点において行われ、ドライバーに注意と安全を呼びかけお守りを配布した。

年々増加の一途をたどる自動車数に交通事情はもはや緊迫した社会問題となっているのは衆知の通りであるが、自動車を操作する人間同士が譲り合いの心を持って交通規則を導守すれば充分事故は防止できる。

この日は、生憎の小雨日和であったが、各関係者は三万に載せた「ステッカーお守り」を一枚一枚渡し、交通安全を呼びかけ行事を終了した。

自然との融和をめざして
「出光北海道製油所竣工」

産北海道製油所は、徳山、千葉、兵庫に次ぐ出光四番目の工場で、三十九年に用地を買収し、政府の需給計画に基づく認可を待って、一昨年七月に起工し、今年九月二十四日にめでたく竣工の日を迎えたのである。

自然との融和をスローガンに、大きくひろがる北方経済圏の拠点都市をめざして胎動をつづける苫小牧市の一角に、今度新たに建設された出光北海道製油所は、徳山、千葉、兵庫に次ぐ出光四番目の工場で、三十九年に用地を買収し、政府の需給計画に基づく認可を待って、一昨年七月に起工し、今年九月二十四日にめでたく竣工の日を迎えたのである。

同製油所内に鎮座する宗像神社での竣工報告祭は、当社葦津宮司外三名の職員と現地の導前出神社職員の奏楽奉仕により出光佐三氏を始め、多数参列のもとに無事祭典が執り行われた。

祭典後の祝賀会に引き続き、市民会館では、長谷川一夫、中村勘三郎、勘九郎親子、西川鯉三郎等出演の竣工記念特別公演が一般者にも公開され、拍手喝采のうちに竣工行事を終了した。

◇社務日誌抄◇

九月二十日、高宮地主祭、辺津宮地主祭、中津宮前祭みなと祭、辺津宮出御祭

十月一日、中津宮出御祭、屯宮祭、秋季大祭第一日祭

二日、秋季大祭第二日祭、流鏑馬命名式、摂末社祭、神宮遥拝式

三日、秋季大祭第三日祭、宗像護国神社祭

五日、出光徳山製油所秋季大祭、玄海町婦人会境内清掃奉仕

六日、八女地方家蚕調停委員四十名参拝、福岡高等検察庁関係者八十名参拝、鹿島建設苫小牧出張所員参拝

十日、中津宮秋季大祭、

十三日、宮地嶽教会四十名境内清掃奉仕

十四日、菊花会理事会、地ノ島秋祭（牧・厳島両神社）

十五日、月次祭

十六日、京大名誉教授　湯川・園田、両氏他数名来社、大分合同新聞社田染氏参拝、

十七日、献茶祭（表千家家元）、献舞祭（井上流家元）

十八日、直方老人クラブ百名参拝

こうのみなと 神湊
(33)

楠早鳥作
福田長庵画

大内弘世　その三

氏俊から返書がついたのは、それから一日の后、盆地を囲む山々が全て紅に染まる頃であった。

返書は先ずこの度の使の目的が充分に成功したのをねぎらい、早速新探題へは使を走らせ子細を告げさした、次に嬰児懐妊を祝い目満ちるまで当分山口に滞在するよう勧め、神湊、仙崎間の航路新設の第一便として弘世に対する礼物を積んで発たせるから受入れの準備を急ぐ旨報らせさした。

そのことを弘世に伝えようと館に伺候すると、弘世も待ちかねたようにすぐ対面が許され

「実は貴公を招こうと思っていたところだ、丁度昨日新探題殿より書状が参り宗像殿の周旋をうけ去る月兵一万を上国より九州探題を発たれたとの由沿道の諸国の向背もただならぬ折柄、当家としても嬶子義弘に兵四万をつけ国境いまで迎えを出す心得にしている。また宗像殿よりの御礼物有難くお受けしよう。ついては、仙崎、山口間の街道の補修、古い橋梁のかけ替えを急がしている。この街道完成の暁には、瀬戸内海賊の脅威を受けずして自由に交易が出来るし願ってもないこと、時に御妻女はその后如何かな、近習の者の知らせによると御懐妊と承ったが、身二つになる迄ゆっくりと逗留せられたい」

この時、近習が趙秩の来訪を告げた。

「丁度よい機会だ、お通し申せ」ほうたる軒秩が部屋に入り弘世に低頭して口を開いた

「恐懼、館主殿の知遇を蒙り思わずこの地に永逗留をいたした拝聞すれば、新探題今川氏俊殿は九州探題の軍勢は西下しつつあった。今川氏俊は後世大学記の作者に擬せられる文筆家だけあって此の時も山陽道沿線の景色を「道ゆき〳〵なる一文にしたためている。

「これより周防のさかひと申す、今夜は多田という山さとにとまりて、朝にまた山路になれば、これなむ岩国山なりけり、一つたつある奥のいほりだにな、人はなれたる山中に、み山木のかげを行く、誠に岩たかく物ほそき路なりけり」

氏俊が大内義弘の軍と出合ったのは此の翌日遠石の浦であった。

（画）

（古　態）
猿林暁月
清水晩鐘
（宮　野）
初瀬清風
（宮　野）
紅橋跡水
（元　琵）
温泉春色
（湯　田）
梅蜂飛鶯
（法泉寺）

（大内町）
氷上蘇著
象峰積雪
（鰐石対岸）
鰐石生雲

×　×
×　×

玄海町 景勝の地五月松原に

老人"憩の家"建築工事始まる

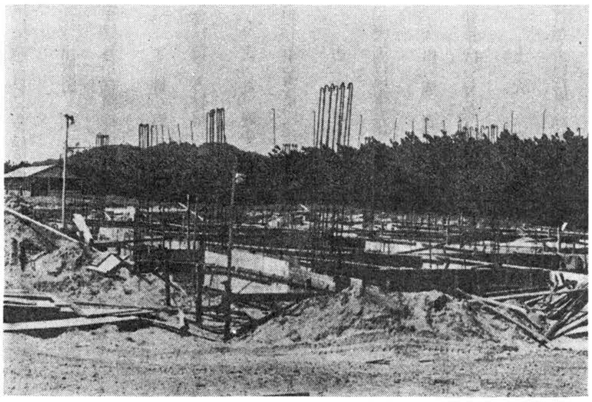
玄海町福祉行政としてかねてから計画されていた"玄海町老人憩の家"の起工式が去る九月八日、当社司祭によって行われ、現在基礎工事の段階となっている。

"老人憩の家"は玄海町神湊の新日本製鉄所有の海の家"玄海荘"横の一部を譲り受け建設となったもので、四方は松林に囲まれ、海岸に近く、憩の場所としては最適と云える。

請負工事額二千九百万円で、来年三月完成し、四月から利用していただく予定になっている。建坪面積は、三百三十七平方㍍で二十一畳の大広間を始め、大小六つの部屋に図書室と浴室（二）が設けられ、ラジューム成分のある井戸を掘るなど"憩の家"にふさわしい建物を目している。

多くの老人等の集合、憩いの場として大いに活用され楽しく、しかも有意義な団体生活を営まれて笑いと共に余生を満喫して戴きたい。

なお地鎮祭は、業者依頼のもとに、玄海町長を始め関係者多数の参列により盛大儀に斎行され、工事期間の無事故と予定通り竣工出来るよう玉串を捧げて祈念した。



（写真は"憩の家"工事現場）

ヾ只今95才 元気なもんですヾ

玄海町最年長者として黒石ロクさん（九五）が、敬老の日、晴れの表彰を受けた。

黒石ロクさんは、玄海町江口生れの江口育ちで、現在子供五人孫十六人、ひ孫十四人と全部の名前を覚えるのに一苦労?しかし至って元気で畑、たんぼを見まわる一方、三百㍍ほど離れた生家に三日に一度の割り合いでお里帰り。

耳も目も達者で、特に眼は目めがねしで針穴を通すことが出来、風呂も食事も自分で済ませ人の手はほとんど借りないとの事。

長寿の秘けつについては「ごはんは腹一杯食べず、何時も腹八分にして三度の食事以外は口を動かさない。そして何時も身体を動かし健康に注意をする」と語る。

長生き出来ることに感謝しながら多くの孫やひ孫に囲まれ、近所の人々と話を楽しむ黒石ロクさんにもっともっと長生きされ生きた教訓を残して戴きたい。

八回目を迎えた敬老の日

―全国各地で祝賀行事―

今年で八回目を迎えた「敬老の日」全国各地で祝賀行事が行われたが、地元玄海町内でも盛大に諸行事が催された。

近年日本人の平均寿命が大幅に伸び「七十才はまだ子供」と云った感さえ思えるのは大変喜ばしい限りである。

そして老人パワーを以って"老人大学"を設け、時代に遅れまいと種々な活動のもとに知識の吸収又研修会を行い、現代に良り良く生きていく知恵を見い出そうと努力する姿勢には若い世代もたじたじである。

しかし、一方に於ては、都会地の一人暮らしの寂しさ、寝たきり老人、生活苦に悩む老人と暗いニュースもあることは隠せない。

「敬老の日」の各地の行事は高齢者表彰、祝辞につづき各種の演芸大会が繰り広げられ、おじいさん、おばあさん爆笑のうちに「敬老の日」祝賀会を終了した。

風物一題

"セイタカアワダチ草"

放生会も済んだ今日、釣川土手にはススキが白い穂を振り川面に立つさざ波はすっかり秋の風情である。

風に揺らぐ白穂は、時には大波の如く、日にはざわめく群集の如く、日々様相を変えて見る人の心を和ませる。

この白穂の見える頃から黄金色の花をつけた美しい雑草が多くなる。そして、その雑草はススキの白とマッチして美しいコントラストを見せている。

この雑草名は「セイタカアワダチ草」と云って、名前の通り高さは一メートル以上になる。この草は戦後目につきだした植物でアメリカ産である。そのアメリカ産のセイタカアワダチ草がどの様にしてこの宗像の地までも住みついて来たかは定かでないが、アメリカ魂で生き抜く力は強く、他の雑草を押し分けて繁殖する姿には一種の不気味さを感じるほど。

この草は、カドミニュームを土中より吸出する力が他の草に比べて非常に強く、公害防止草として注目を受けたが、今では異状発生のため刈取ってからの処分に問題を生じていると聞く。又花粉はゼンソクを引き起す因を持っており、有難くない草となっている。

ともあれ、月の美しい今日、見る人々には、夢の国の花園の様な美しさで心を和ませ、ススキと共に釣川の秋の風物として名を日々高めている。

車窓より眺める時、この地が、かって菜の花畑の名所として高く春を人々に知らせた如く、今は彼の草花によって秋を映している。

"玄海町を花で飾ろう"

―花いっぱいコンクール開かる―

第十回玄海町、秋の花いっぱいコンクール審査が九月二十日、玄海町に於いて行われ、江口、牟田尻分館が晴れの優秀賞に輝いた。

花いっぱい運動は、玄海町を花で飾り、町民はもとより訪れる人々に"和やかな心"を持っていただこうと十年前に発足、以来今日までの運動は高く評価されている。

成績は次のとおり

一般の部

優秀賞 江口分館
〃 牟田尻分館
優良賞 本田野分館
〃 祓川分館
〃 下大分館
努力賞 神原分館
〃 竜王分館
〃 多礼分館
〃 下町婦人会
〃 今門分館
奨励賞 釣山分館
〃 荒開分館
〃 畑 分館

学校の部

優秀賞 地島小学校

以上

話題の新車をみる (七八)

新ブルーバードUの巻

このところ、自動車関係一つを採ってみても何んだかんだで世の中の動きが慌しくなってきている。

政府は、昭和四十九年度から「第七次道路整備五ケ年計画」の財源確保と公害の車社会にブレーキをかけるという名目で「自動車の関係諸税」を大幅に引き上げる方針である。

また、ガソリンの完全無鉛化（来年四月実施予定）を前に、已に一千億円をかけて生産工程を改善、「準備は完了」とする石油業界と、部品生産が間にあわない等の理由で「体制が整わぬ」とする自動車業界が熱い火花を散らしている。とりわけ四十六年以前の未対策の車が一千万台以上あって早急に切り換えを行った場合、人命問題も増発しかねないとあって、通産省としても、どうやら来年四月から加鉛・無鉛の二本立てとして二～三年後をメドに無鉛ガソリンに一本化するーという折衷案に落ちつきそう。

また、この十月から軽自動車にもいよいよ車検が実施されたが、目下約六百万台に昇る軽自動車は政令第四三八号の検査月指定表に基づき車検を受けねばならないーなど社会情況の急速な変化と社会的気運の高まりに伴って、種々の改革が次々に打ち出されようとしている。

扨て、今回は二年ぶりにイメージアップされた日産自動車の花型車種なる"青い鳥"ブルーバードUシリーズを旧車種との比較を中心に紹介したい。

今回のマイナーチェンジは一八〇〇cc・一六〇〇ccのセダンハードトップそしてワゴンと十三車種、二十四タイプにわたって行われたもの。しかし、大幅なものではなく内外装の一部変更に留まり主に化粧直しと使い勝手の向上である。

主な改良点は、外観ではラジエーターグリルのデザインが一新され、彫りの深いグリルにサイド・フラッシャーランプを巻込んだワイドなもの。これは十二月一日からの保安基準改正で他のランプとの兼用が禁じられ視認距離の改善が規定されたため。

リア・スタイルについては、バックアップランプは、旧型に比べて面積で凡そ二倍に拡大され、パーキング・フラッシャー・テール兼ストップランプ等一連のコンビネーションランプがひと回り大きくなって視認性も向上した。

またSS、系車に、キャップレスホイールおよびリムリングが新設され、タイヤもダブルリボンから黒タイヤに変更した。

次に内装面ではインスツルメント・パネルのデザインの変更が最も大きな改良点であり、丸型メーターから角型メーターになり、スピードメーターとタコメーターを大きく中央に設けている。また、同じくSSS系車だが、ステアリングホイールは外径三九〇ミリ、グリップ径二五ミリ握りが太くなり使い勝手が向上。ハンドブレーキについても、ステッキタイプからセンターレバー式に変更。

この他、デラックスを除く乗用車系全車とワゴンに、間次式ワイパーが、また乗用車系全車にトランク・オープナーが付けられ、一層のイメージアップとなった。

宗像史蹟 (三)

飯盛山古城 (二)

二

永禄十二年（一五六九年）九月十日宗像氏貞は数千の士卒をもって、段の原に向い、毛利氏の軍を援けた。

飯盛山を本陣として、楢の折枝の大幕を波打たせて旗指物は高々と立並べて厳重に備えた。

前回のべたように立花城主立花但馬守鑑載が正式に大友氏に謀叛したのは永禄十二年からで、よって大友方では戸次丹後守、臼杵越中守が立花城に攻寄せ、四月二十四日一息に城を乗崩したので、鑑載も切腹して、ここに立花氏は滅び、その後には大友義鎮の股肱の臣戸次丹後守道雪が立てこもった。

そもそも宗像家の紋はその昔、白地に菊桐の紋を用いていた。これは初代清氏親王の時から伝へ来たったもので、皇室の菊花の紋を用いたのである。それが建武三年（一三三六年）宗像大宮司氏俊が足利尊氏に従い、肥後の菊池武敏の軍勢と多々羅浜の大合戦に、諸軍勢が中食を楢の葉に盛って食べ、その日の戦に勝利をえたことは吉例であるということから、その後大宮司家では楢の折枝を家紋に用いるようになった。

さてこの時毛利家から三戸新兵衛という者が使に来たので、氏貞は「われらのこの度の忠心をよく御覧になって、仔細を毛利殿へ御話下さるよう、また田舎の軍の様子も御見物あるように……」といって幕の内に請じ入れた。

いよいよ先陣、後陣共に整ったので一度にどっと鬨の声を上げて矢軍をはじめた。それも一段落すると太刀をぬいて、鎗、薙刀の鞘をはずして、入乱れて戦った。

ここにその日の大将と見うけられる緋威の鎧を着た武者が鹿毛の馬に乗って鞍かさに立上り大音声によばはった。

「われこそは奴留湯久則という者なり、われと思わん者は出合って勝負せん」と、すると味方の陣から萌黄匂ひの鎧を着て黒い馬に乗った武者が進み出て、「奴留湯殿とやらに見参せん。われは吉田守政と申し生年十八才の若輩ながら御相手仕らん」と名乗りかけ馬を打寄せ戦うかに見えたが、むんづと組んで両馬の間にどっと落ちた。両者はいずれも大力の剛の者で、上になり、下になり二、三度組合ったが、ついに狭い溝川に転げ落ち、溝の中で久則が終に守政を組伏せて押付け、腰の刀に手をかけた。その時守政は下から久則の鎧のわたがみをとって引付け、刀を抜き上げさまに二刀さし取ってはね返し、押して首を斬り取り、目よりも高くさし上げた。敵も味方もこれを見て、「天晴れ今日の見物かな」といってほめたたえぬものはなかったということであこ。立花勢も奴留湯を討たれて心後れ、それにひきかえ宗像勢はこれに力をえて一揉みに攻めかけた。氏貞は馬を四方八方に駈まわし、采配をふり、勢づけると味方の軍勢はますます力をえて、斬って斬って斬りまくった。この勢威に敵も早や足なみは乱れ右往左往に逃げ散った。この戦況を見物していた新兵衛は、この始終を披露するため毛利の陣所へ急いだ。この報告を聞いた毛利氏は氏貞を類いない頼母しい人物とほめたたえたということである。

久留米工業学園
短期大学助教授
田中政喜

酒処

「初吉野」本舗

石蔵酒造株式会社の巻 (9)

今回は、福岡市へと足を進め、市内唯一の酒造会社「初吉野」醸造元、石蔵酒造株式会社を訪ねてみた。

社屋は、福岡市東区堅粕一丁目三十番一号で、旧制福岡中学校、現在の福岡高校の前にあり、酒蔵から流れる芳醸な香りは、勉学中の学生を悩ませ続けてきたという福高出身者馴じみの酒屋である。

この石蔵家は、慶長五年（一六〇〇）黒田長政が筑前五十二万石の大守として入国、博多の西の福崎に城を構え、福岡城と名づけて城下町の経営を始めた時に、播州播磨国石蔵村より黒田長政に従って来福した石蔵利八を初代とした黒田家の御用商人であった。屋号石蔵屋は、出身地石蔵村よりとっている。この石蔵屋は、壱岐、対馬との交易を思い付き、以後明治初期頃まで酒造業と海産物問屋とを合わせての商いを行なっていた。海産物と自家醸造酒「吉野」とを物々交換し利益を上げていた。

現在の石蔵酒造株式会社は、前記の「石蔵屋」から明治初期分家し、昭和三十三年法人化し、現称にて独立、現社長石蔵利蔵氏は分家後三代目に当る。

酒銘商標「初吉野」は、石蔵屋本家が昔より醸造していた最高級酒「吉野」より取り、石蔵屋より初めて分家したので「初吉野」と名付けたという。

伝統的な酒造法に漸新な醸造学を取り入れ、現代にマッチした"より美味しい"酒"としての酒造りに日夜努力している。

扨てこの石蔵酒造のキャッチフレーズは「新鮮な酒初吉野」である。一般的に日本酒は、壜詰をしてからなるべく日の浅い酒が旨いとされ、同じ銘柄の酒でも格段の差がでてくるといわれている。だとすれば買いつけの小売店で、一番回転のよくしかもよく売れてる酒が、最も新しく旨い可能性が強いということになる。これは地方の酒、一般に言うところの「地酒」の大きな利点である。

清酒「初吉野」

販路 大半を福岡市内
他に北九州市、長崎県
熊本県

販売石数四二〇Kℓ

水 良質な地下水を使用

米 糸島産の酒造好適米

蔵人 城島の杜氏を始めとして十三名

宗像大社歌会 俳句作品集（一二九）

大井　安部　重郎
曼珠沙華我にもありし少年期

東京　小浦　太平
水田の風かんばしき晩夏かな

藤・沢　井上　団平
露道にみゝず遊べり夏の朝

福岡　入江　柳江
付添ひの照る日くもる日扇風機

津屋崎　菱花　女
夏まけの吾が頬骨の露はなる

東郷　有吉　春子
丹念に庭掃く夫に秋暑し

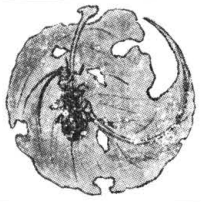
武丸　野中　和子
栗熟れし事も書き添へ娘へ便り

吉留　伊豆　湧泉
大阿蘇に向け風渡る花すゝき

田熊　安部　ユキ
空仰ぎすばらしきかな星月夜

土穴　八尋　恒夫
社日来て古い行事の潮井くみ

東郷　大和印刷内
秋晴の大漁旗なびくみやれ祭



宗像大社沖津宮祭祀遺跡

昭和四十五年度調査報告

沖ノ島

単なる使用でなく、古来の沖ノ島信仰から考えるならば、これら使用者の間では厳守斎用されて来たものである事は間違いないと私は信じている。

最初の使用者は誰であるかは記録も伝承もはっきりしないが、沖ノ島の古代祭祀の上から考えて、恐らくはその奉仕者ではなかっただろうか。然しこれは単に神主だけの忌詞でなく、江戸初期に於いてはすでに沖ノ島に渡る者（特に黒田藩の定番勤務者）或はまた季節的に在住する海人たちによって聞き伝えては厳守して来たものと思われる。

「三社縁起」には種類をあげてあるだけであるが、青柳種信の「防人日記」（江戸後期）には、島守も海人も使用している事が記してある。それ以外若干の記録はあるが、大島の漁師で若い頃から沖ノ島に出漁していた古老から10年前に私が聞いた話によると、沖ノ島出漁中は数多くの忌詞を常に覚えておいて、これを間違いなく使用しなければならなかったそうである。若し、うっかり使用を誤った場合は、船頭衆から海中に突き落されて潔斎をさせられたとのことである。そうしたことが厳守されていたのは、明治も半ば頃までで、それ以後には殆んど使用されなくなり、時たま、じょうだんまじりに使用される程度で、昭和に入った頃にはすっかり昔語りになってしまった様である。

私が昭和3年に始めて沖津宮に勤務した頃には、すでに漁師仲間でも神主自らも、忌詞を使用することはすたれてしまっていた。

明治以後、沖ノ島忌詞がすたれた原因は種々あるだろうが、維新後社家以外の神主の勢威が強かったことが主たる要因ではなかったと思うが、その経移については、今は詳述しない。

前述の通り、江戸初期にはすでに忌詞が存在し、且つ明治中半まで漁師もこれを厳守していたというが、その漁師たちは絶海の孤島にまで果して出漁していたのだろうか。

貝原益軒翁の書物の中に、大島、鐘崎（玄海町）、初ノ浦（遠賀郡）の漁夫が春夏秋に沖ノ島に来たりて漁をした事が記してあるので、少くとも3百年前から漁師仲間は沖ノ島に移住していた事が判明するわけである。

又、家光将軍のいわゆる鎖国令と同時に黒田藩では沖ノ島に定番というものを派遣するようになり、藩士が三人ずつ百日交替で維新まで続いている。これらの人々も、沖津宮の御神威を畏んで、忌詞を使用した様である。即ち「防人日記」の中に「忌詞などもやうやう帰るべき間近くなりていひあやまたずなりぬ」と記載してある。

4、沖ノ島の忌詞の種類

沖ノ島の忌詞について新刊の「宗像神社史」中にもみられる通り、貝原益軒の記述を始め諸書に収録されていることが記してあるが、その詞数はあまり多くない、然し私が30数年前に島の古老から収録した時には50数種類あった事を記憶している。その記録も内務省に提出したまま今は手元になく、又、現存の古老で、はっきり覚えている人も少いが、今、分っているだけをまとめて次に掲げてみよう。

○筑前国続風土記（貝原益軒）

「此島に忌詞多し、常の詞はけがれ也と云、僧尼山伏女人牛馬鹿ねずみ杯は皆別名有」と記して具体的例証を挙げていない。

○宗像神社縁起附録―奥津島（貝原益軒）

死―くろやうせい　烏―くろとり　僧―まるやうせい
塩―なみのはな　尼―かみなが　六畜類―よつ　女―ほとめ　升―はかり
衡―ためし　酢―みみとり
味醤―ひしほ

以上11詞を挙げている。

○沖津宮社格目録

死―黒ようせい　僧―丸ようせい　尼―髪長ようせい
うま―はねよつ　うし―角のよつ　狐―尾長よつ
猿―かきよつ　猪―いのよつ　鹿―かのよつ　すべて六畜類をよつ　座頭―しのようせ　山伏―山のようせい　産の穢―あかようせ
烏―黒鳥　女―ほとめ
量―ためし　塩―浪の花
升―はからひ　味醤―火志（ひし）於
酢―耳取　柄杓類―曲り

以上21詞を挙げている。

なお、右の忌詞を申し誤った場合には「天性」と唱へ改むべしと記してある。

○防人日記（青柳種信）

「此の島に忌詞あり、仏経僧尼等を始め器やうの物にも忌詞あり。されど舌のは失せ果てたりとみえたり。今いふは皆海人が定めつると覚しくいやし。」

これも例証を挙げていない。

○福岡日々新聞（今の西日本新聞）

飯―キワ　杓子―キワマガリ　箸―ヨロズ　酢―ミミトリ　醤油―タマリ
酒―チンタ　岩・石―マリヤ　莚―イナマキ　火箸―ヒゾー　牛―ツキヨツ
小便―アマケ　大便―ゴーヤ　味噌―ヨーセ　味噌汁―ヨーセノヨーセノ

以上14詞を掲げている。新聞の切抜きで年月日を記入していないので確実な事は分らないが、昭和10年前後の7月初旬頃に掲載されたものである。

二宮佐天蕊主人 四島一二三伝

―原田種夫著―

かれの生活もだんだんに充実し従業員にぜったいに信頼され、かれは自分の思う通りにやっていくことが出来るようになった。その頃のロスアンゼルスは、人口が六万人ぐらいであったが、今では二百五十万人もあって、この町に自動車がはじめてできたのは、四島青年が渡米して六年目ぐらいであったろう。

自動車は、一八六〇年（万延元年）フランスのルノアが実用に近いものを発明したが、実用化したのは、ドイツのカールー・ベンツトとゴットリープー・ダイムラーである。彼らは各々べつに一八八五年（明治十八年）実用化した。そして一八九一年（明治二十四年）フランスで製造に手をつけた。皇太子嘉仁親王（のちの大正天皇）と九条節子姫（のちの貞明皇后）がご婚約をされたのは明治三十三年の二月だが、この慶事にあたってサンフランシスコ在留の日本人会が電気式自動車を献上した。これは明治三十三年五月に到着した。これが、日本にお目見得したさいしょの自動車であって外車第一号だった。

明治四十年、四島青年は、一台の車を買った。オーバランドという。当時の高級車で千五百弗もする車であった。やっと自分で運転ができるようになった二週間目のこと、サンタバーバラにいる友人を訪問しようと山道を走っていた。ところが、人をよけようとして運転を誤り、車が一五〇〇尺もある谷に向って墜落した。あっと思った瞬間、目の前に張られた二本の鉄条網が目に入った。このまま進めば、首がその鉄条網で切れてしまう。左手でさっとその鉄条網を払った時に、思わず右手でハンドルを切ったらしく、ずるずると辷って木の根っ子にぶち当って車は止った。一七四尺（約五十数米）谷底に転落したことになる。瞬間の出来ごとだが、頭と手に軽い怪我をしただけで命拾いをした。ずっと前に貨物列車の中で凍死しかけたことがありこの自動車の転落でも危うく命が助かった。天佑というものかもわからない。

日に五ドル払って病院に入り、一カ月ほど静養したらすっかりもとどおりに元気になった。自動車はめちゃくちゃにこわれてしまい、千五百弗で買ったものが、スクラップ同様で七十弗にしかならなかった。

この運転を誤って死にかけた事件を、当時の邦字新聞が報道した。その記事の切り抜きがあるのでここに写してみよう。

「四島氏の災難＝サンタポーラ・レモン・キャンプボスの四島一二三氏は、去る日曜日、新調の自動車にてサンタバーバラ市に向う途中、誤って絶壁の山道より自動車とともに墜落し、約三百尺の谷間に止りしも、千五百ドルの自動車は粉微塵となり、当然即死の災難に遭うべき筈の同氏は不思議にも跳ねだされて、面部及び手首に軽傷を負いたるのみなりしとは、不幸中の幸というべく、墜落当時現状を目撃し居たる白人等は、四島氏の死より免れたるを一個の奇蹟と称し居れり。尚、破壊したる自動車は、七十ドルにて売渡したりと云う」

まったく、この記事の通りであった。ふつうであったら即死するところであったが、木の大きい株に転落の途中で自動車がひっかかり、ぱっと車外に跳ね飛ばされたばかりに一命をとり止めることが出来た。九死に一生を得たというのがこの事であろう。

右の新聞の中でキャンプ・ボスといっているが、ボスというのは、日本では親分とか顔役の意味だが、アメリカでは親しみをこめた呼称でチーフ、すなわち、首領とか、長官とか、酋長といった意味になる。

さて、自動車事故にあって病院に入ったが、約一カ月ほど静養して元どおりに元気になってキャンプに帰った。みんな、四島青年が元気な姿で戻って来たのを歓迎し、「奇蹟だ、奇蹟だ」といって喜んだ。四島青年は以前にもまして仕事にうち込んで働いた。ところが、ある夜のこと、故郷の金島村から一通の電報が届いた。

「チチキトク、スグカエレ」

はっとした。

電報をもつ手が慄えた。顔色が蒼くなった。故郷を後にしてもう十年、どんなときにも瞼のうらに故郷の山河が映っていた。懐かしい父母の顔や、兄弟の面輪がくっきりと空間に浮かんでは笑いかけていた。そういうものこそ、渡米して放浪していた時代も、キャンプボスになった今日も、強い心の支えではなかったか。ほとんど故郷には便りもせず、たまに一枚のハガキに近況を知らせるだけであった。いま、突然に父の久五郎氏が危篤だという知らせである。これという親孝行をした覚えがなく、むしろ親不幸をした記憶ばかりが強いのだ。

樹静かならんと欲すれども風定まらず
子養わんと欲すれども親待たず

いわゆる、風樹の嘆きが青年の心を螫した。つらかった。すぐにも、飛んで帰りたいのだが、ふる里は余りにも遠い。せめて父の死の床に元気な顔を見せ、死にゆく父に己れの不孝を心から詫びたいと思った。

（つづく）

見聞記

韓国一人歩き

韓国の女性と聞けば〝チマ・チョゴリ〟を連想するが、日本人が普段礼服を着ないと同様、ソウルではほとんど見かけなかった。

しかし、地方に行くと〝チマ・チョゴリ〟の民族衣裳をまとった男女が多く、特に結婚した女性はほとんど民族衣裳をまとっていると聞く。

九時過ぎタクシーを拾う為喫茶店から表通りに出た。すると数少ないタクシーを大勢で奪い合う激しい模様が繰り広げられていた。

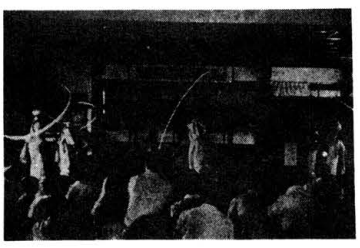
韓国の夜は、午前零時から午前四時まで外出禁止となっている。

この為タクシーは、午后十時にもなると非常に少なくなり、人々は遅くとも九時半頃帰宅に向うため、それが重なってすさまじいばかりの混乱になるのである。

筆者はやっとの事でタクシーに乗り込み彼女と別れホテルに着いた。

翌日曜日、ユウスウゴン氏と奥さんの出迎えを受けホテルを出て市内見物。

夏の強い日射を浴びながら南山にある電波中継塔、ウォーカー・ヒル（元来ウォーカー・ヒルは、韓国を訪れる外人観光客と駐韓UN軍兵士の総合娯楽休養施設として作られたもので、多彩な娯楽施設は名実共に東洋一の折紙が付けられている。ここにはカジノを始めレストラン、パシフィック・ナイト・クラブ、ボーリング場、国際会議室、ゴルフ場、バー、射撃場などがあり、財布の重たい人には正にこの世の天国、吹けば飛ぶような筆者の財布では施設見物が精一杯のお粗末）を観てソウル国立博物館へ。



国立博物館は、徳寿宮の一角にある韓国最初の洋式石造殿で、設備の整った館内には〝韓国の歴史〟をひもとくに必要な重要な資料や美術品が数多く保存されている。

新羅芸術の最高傑作と云われる慶州石窟庵の仏像を始め、高麗青磁、高句麗時代の壁画等、各時代各分野に亘って代表作が展示されており、どれも立派の一語につきる。

韓国の歴史をかじりながら一路ドライブコース〝スカイウェイ〟にタクシーを飛ばす。スカイウェイは、ソウル市内の裏手にあり全長十三㌔北側のゲリラに対処する為作られた道路であるため撮影は禁止となっており、景色の良さにつられてうっかりカメラ等出さぬ様注意が必要。

スカイウェイを往復した后、旅行の目的でもあった〝韓国の家〟に向った。

〝韓国の家〟には、韓国の民芸品を始め、生活様式の資料、民族舞踊の実演、勿論古典楽器も展示されていた。

韓国固有の音楽は、雅楽、唐楽、俗楽の三種からなり、前二者は中国から伝わり、後者のみ韓国独特のリズムを持っていると云われているが、現在は三者を指して国楽と云っている。国楽はほとんど五音階からなっており、七音階を主とした西洋音楽に比べると単調に感じるが親しんで来ると〝神秘な雅楽の施律〟である。この点については、日本の雅楽と大した差異はない。只日本で雅楽の楽器と云えば、笛、七力、笙の三管と鳴物（太鼓等）和琴（六弦）であるが、展示所に七力と笙を見ず、又笛の穴数に多少の違いを見受けた。実際の演奏がなかったので真偽の程は解らないが、おそらく少数の楽器で肉感的な音楽を奏でるのであろうか。

二人と別れホテルに着いたのが午后八時。明日のイムジン行きを楽しみにしながら早めに床に就く。

「今日もいい天気だ」フロントに鍵を預け、表へ出てタクシーに「イムジンまで」と告げる。

独立門（一八五八年、大韓帝国が清国からの独立を記念して建てられたもので、フランスの凱旋門を型どっている）を通り抜け、左右の平野を見ながら、舗装の行き届いた道路を快適に走っていると処々で大きな石のゲートに出会う。このゲートは、非常時に何時でも爆破して道路を遮断し、戦車などの進路を妨害するために作られている。

更に進んで行くと、鉄道が切れて大きな看板が見える。

「あれは何ですか」

「鉄道中断点です。そのわきに書いてある文字は、〝汽車は進みたいのだが……ですよ〟」

と運転手さんは笑いながら教えてくれた。更に十分ほど走る。

「イムジンですよ」

の言葉にタクシーを降りて眺めるとまさしく〝イムジン川〟

すぐ近くのレストハウスの2階に上り、もう一度眺め直せば、成程歌に代表される〝ゆったりした流れ〟を平野と山野との間に見せ、何んとも云い様のない哀愁を感じさせるイムジン川

「過去において沢山の犠牲者を呑んだイムジン川は、今でも時として水が赤くなる。戦争を知っている者は、イムジンの流域で取れる魚は絶対に食べない」

と話してくれる老人の言葉に哀れさを痛く感じる。

このイムジンから数キロ行くと有名な板門店があり、その先が非武装地帯と掲示されている。

レストハウスでは、家族連れや観光客、若い男女が美味そうに食事しながらイムジン川を眺めている。

駐車場には、一般の乗用車と一諸に2台の戦車が実戦配備され、砲門は鋭く対岸をにらんでいる。

そしてその前方では、国連軍が重装備で警戒に当っている現実は、昭和生まれの筆者には、いたづらに頭が混乱するだけであった。

只、レストハウス内数ケ所に、大統領の直筆として「南北統一」が記されていることに歴史の流れを見た。

（つづく）